

## 02-003

## 電話・来館相談から考えられる育児支援

中辻 浩美<sup>1</sup>、加藤 康代<sup>1</sup>、積田 文江<sup>1</sup>、長村 敏生<sup>2</sup>、  
大矢 紀昭<sup>1</sup>、澤田 淳<sup>1</sup>

<sup>1</sup>京都市子ども保健医療相談・事故防止センター、  
<sup>2</sup>京都第二赤十字病院

京あんしんこども館は、小児科医師と保健師・看護師が常駐し、子どもの不慮の事故を減らすことと育児支援のための相談を行っている。今回、平成26年度1,212件の相談を分析することで今後の課題を見出したので報告する。

## 【相談の方法】

保健師か看護師が電話を受け、内容により医師・保健師・看護師が対応している。必要に応じ来館による面接相談（2回/週；医師会の協力あり）を行っているが、診察しても治療はしないため継続が必要な場合は他の医療機関を紹介している。

## 【相談の分析・考察】

京あんしんこども館では、疾病や発達、日々の育児や栄養など子どもに関するあらゆる相談に対応している。相談者は、30代の母親が66.9%を占め、次いで40代の母親が12.2%であった。出産の高齢化に伴い相談年齢が高いと考えられる。対象児は、第1子が61.9%で、0歳児40.8%・1歳児24.2%であった。初めての育児で不安もあり、子どもの変化に対応できないことが考えられる。相談内容を分類すると疾病関連が37.9%、事故関連が17.2%、一般生理が10.4%で上位を占め過去5年においても順位は変わらない。460件の疾病関連では、感染性症状（発熱・咳・下痢・嘔吐等）が56%を占めており、（受診の目安を知りたい）（症状が続いているがどうすればいいか）（坐薬の使い方）などであった。医療機関を受診後の相談が66.5%を占めており、受診後でも症状などの不安や対処方法の理解不足で相談するケースが多い。かかりつけ医に上手に質問ができるように指導することが必要である。受診の目安を助言することで不必要な受診をさけることにも繋がると考える。209件の事故関連では、誤飲：41.1%、転落：21.5%、衝突：15.8%、転倒：5.7%で過去5年においても順位は変わらない。窒息や転落等の後遺症が心配される相談もあるが、実際に診察せずに対応しており経過も確認できていない現状である。一般生理の内容では、便の性状や回数についての相談が35%あり、いつ乳や生理的反射、泣きやまない等の相談であった。ネットからの情報による不安の相談も多い。正常と判断される内容が殆どだが、親にとっては不安であり相談できることで安心に繋がっている。来館による面接相談では、半数が発育・発達相談であった。気になる症例は、保健センターと連携し対応している。

## 【課題】

・指導内容の適否の確認方法の検討・かかりつけ医に上手に質問できるための指導方法の検討

## 02-004

## 乳幼児健診「愛ちゃんワールド健診センター」における10年間の取り組み

志村 貴美恵

医療法人 愛和会 愛和病院

昨今我が国では、少子化・核家族化・育児不安の増大が深刻化している。

昨年の合計特殊出生率は1.42人、当院がある埼玉県はそれを下回る1.31人である。

当院は産婦人科、小児科を標榜する出産をコアとした病院である。母子に寄り添うことを責務と考える当院では、10年前の平成18年10月より、お母様にとって身体的・精神的に最も負担が大きい産後から子育て期を継続的にケアするための乳児健診施設「愛ちゃんワールド健診センター」を設立した。

この10年間に延べ12万人を超える方にご受診いただいたことから、育児不安の解消や安心して子育てをスタートできる空間の必要性を感じた。当時他では行っていない2週間や2か月健診の受診率の高さから、特に生後100日間の継続したケアの重要性を確信することが出来た。

当施設は母親に寄り添う様々な育児・育母支援プログラムを行うことで、子育てファミリーにとって無くてはならない施設になったと考える。今後の課題として、これからますます重要になるであろう父親の育児参加について、より積極的な参加を促せるようにすることで、子育てファミリーへのサポートを強化していきたい。

病院本体の機能と併せ、妊娠・出産・子育てを一つのストーリーとしてとらえ、育児不安の解消、安心した子育てのサポートを目的に設立した当施設が、目的通りご家族に寄り添い続けることが出来たのか、この10年の歩みを報告する。